# 週刊センターニュース No.327

Center Research Higher Education Evaluation Student Support System

第３２７号（２０１０年１０月４日）毎週月曜日発行
発行：金沢大学　大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm


## ○●○　２０１０年度大学コンソーシアム石川 FD フォーラムのご案内　○●○

日時：１０月９日（土）１３時―１７時３０分
場所：金沢大学サテライトプラザ３階（金沢市西町教育研修館）
テーマ：「初年次教育とカリキュラムポリシーについて」
趣旨：来年４月の省令施行により、すべての大学・短大に公表が義務づけられる教育情報において注目されるのはカリキュラムポリシーである。同一名称であってもそれぞれの大学の学部・学科ごとで異なる。とくに、現在ほとんどの大学等で実施されている初年次教育がどのように位置づけられるのか、まさに各大学等の教育の特色が鮮明に現れることになる。あるべき初年次教育、学士課程教育を考える好機といえる。

日本の初年次教育研究の第一人者であり、また、同志社大学のカリキュラムポリシー策定の議論を引っ張ってこられた、山田礼子教授を基調講演者にお迎えした。参加高等教育機関からの報告を交えて議論を深めたい。

内容：13:10～　第一部　基調講演　「初年次教育の進展：DP、CP、AP 明確化の流れのなかで」
山田礼子（同志社大学社会学部教授、初年次教育学会会長、大学教育学会常任理事）
14:30～17:20　第二部
報告１「地域を舞台にした初年次教育への試み」垣花渉（石川県立看護大学准教授）
報告２「１年前期必須科目『大学・社会生活論』の運営と課題」古畑徹（金沢大学教授）
報告３「初年次ゼミから始まるキャリア教育」中本義徳（金沢星陵大学教授）

※参加申込み：件名「ＦＤフオーラム申込」として、①機関名②所属③氏名を記入の上、oono@ucon-i.jp（担当：大野)まで、ご連絡下さい。

## ○●○　科学技術振興機構研究プロジェクト「自閉症に優しい社会：共生と治療の調和の模索」第５回「自閉症にやさしい社会」研究会のご案内　○●○

テーマ「自閉症に優しい大学①ー授業を変えるー」
日時：2010 年 10 月 13 日（水）19 時―21 時
場所：金沢大学角間キャンパス中央図書館 2F AV 室
担当：青野　透（金沢大学大学教育開発・支援センター教授）
趣旨：発達障害かもしれない受講生がいることを前提に授業をする。大学の教員に、そのための授業設計、授業運営技術が求められる時代がやってこようとしている。大学入試センター試験でも、来年度から、医師の診断書などをもとに発達障害のある受験生に対して、試験時間の延長や別室での受験などの特例措置がとられることが決まった。大学教育は、この十年ほどの間に、聴覚障害学生に対してのノートテイカーによる授業情報保障が当たり前になるという劇的な変化を見せた。それでは、発達障害の学生、例えば、アスペルガー障害の学生がおり支援を申し出ている場合に、教員はどう授業を変えていかねばならないのだろうか。また、変えようとしてもできないのならば、それを阻んでいるのは何だろうか。カリキュラムを含め、大学の教育システムそのものの見直し、さらには大学教育の意義についてのより深い考察を求める問いである。

まずは、山本佳子( いわき明星大学)・仁平義明(白鴎大学)「アスペルガー障害学生の学業支援ー教員・職員・相談担当者・学生間の支援許容度の違いー」『学生相談研究』３１巻第1 号（2010 年７月）を手がかりに、発達障害学生のために授業を具体的にどのように変えるべきか、またその教室内の他の学生たちにどのような理解を求めるべきかについて、参加者と一緒に検討を試みたい。なお、全ての大学、短期大学等に法的に義務づけられた「授業内容・方法の改善のための組織的な研修・研究」（FD）の喫緊のテーマであり、教員の課題でもあるが、同時に、学生自身にとっても重要な事柄である。学生たちの参加を特に強く望みたい。

## ○●○ 日本教育心理学会第 52 回総会特別講演　茂木健一郎「創造性をはぐくむ教育ー脳科学を生かしてー」参加報告 ○●○

８月 27～29 日に、早稲田大学にて開催された、日本教育心理学会第 52 回総会特別企画シンポジウム「創造性

をはぐくむ教育ー脳科学を生かしてー」（茂木健一郎）に参加した。

実際には、「脳を生かす」というトピックにはあまり触れられておらず、過去に輝かしい功績を残した研究者や偉人の話を例にしながら、個の能力を伸ばすことの重要性が論じられた。

過去に不世出の天才と謳われた哲学者や研究者たちの中には、一般人のものさしでははかれないような側面を持った人物が多い。その中には、いわゆる学校不適応児であった者、社会的不適応としか考えられないような生活を送った研究者もいる。

茂木氏が例に挙げたのは、ポアンカレ予想を解いたグレゴリー・ペレリマン、20 世紀最高峰の哲学者と謳われたルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインである。

ペリルマンは米国で研究生活を送るが、ポアンカレ予想を解くために故郷のロシアに戻り、予想を解いてからは森の中に入っていき、隠遁生活を送ってほとんど出てこない状態になってしまう。

ヴィトゲンシュタインは、ラッセルとムーアの指導を受けた哲学者であるが、あるときスウェーデンの山奥に引きこもってしまい、時折原稿の提出のためにラッセルを訪ねることはあったという程度である。加えて、博士学位論文の註をめぐって、ムーアと喧嘩して学位と友人を一気に失っている。その後、自殺願望を抱えた時期を経、スウェーデンの田舎町で小学校教員を務めていた（彼にとって、人生で最も幸福な時期だったようである）が、体罰問題をめぐって生徒の保護者と対立するなど、その生涯を通じてさまざまな揉め事に事欠かなかった人物である。

茂木氏は、これ以外にも同性愛者だった偉人、色恋沙汰をきっかけに殺人を犯した偉人などの話を例にひきながら、偉人たちの望ましくない側面を、学校では一切教えないことについて、「世の中には光も影もあるのが当然でありながらも、国の指導基準が、実はこうした影の部分が存在することを隠していることが果たして妥当なのか」と疑問を述べている。そして、彼らの多くが、学校教育ではなく、いわゆるホームスクーリングで才能を伸ばしていることにも触れ、「国が指導基準を設置し、世の中の良い部分だけを教え、社会的に望ましい人間を育てることに重点をおいていること自体が、子どもの可能性を逆に押しつぶしている可能性があることは、こうした歴史上の偉人の例から明らかである以上、国が指導基準を設置する形ですべてを規制するような教育のあり方はもはや時代遅れである」と述べ、国の基準自体を疑問視している。

さて、同氏の議論はやや過激ととられるかもしれないが、単に喧嘩を仕掛けているわけではない。現代日本の閉塞感と頭打ち、主にアジア諸国から遅れをとっている現状に対して大変な危機意識を持っている。同氏の主張するところでは、指導基準の設置が、学習内容の「上限値」を暗黙裡のうちに設定しているものと読み替えることができる以上、こうした「上限値」が、実は天才となりうるかもしれない子どもの成長可能性を押さえ込んでいることに危機意識を抱いているのである。そして、学校の中で適応できない子どもをひそやかに排除しようとすることを黙認する学校現場のあり方は、多様な個性と生き方を暗に否認しているのも同然であることへの問題意識も抱いている。多くの偉人たちの中には、確かに学校や社会に適応できなかった人物もいるが、彼らが生きることと、その個性と才能が容認されたからこそ、人類の功績は生まれてきたことを強調している。そして、現代の日本の閉塞感を破る可能性があるのも、こうした天才かもしれないと述べている。その理由は、ビル・ゲイツのように、何百万人という雇用を、天才の才能が生み出す可能性があり、経済の活性化にもつながるからだと茂木氏は考えている。

グローバルな時代の中にあって、世界水準に通用する人物の育成が必要であることは、あらゆるところで声高に叫ばれている。茂木氏の考えるところでは、その目的を達成するためには、「①基準、規制という枠をなくし、その人自身の才能と個性を思い切り伸ばせる社会を作ること、②自分のできないことについては、それが得意な他者とつながることで、何かを実現する力のある人材を育てること③自分にないものを持つ他者とつながるために、どこへでも出て行く勇気を育てること④個人の可能性を妨げるような規制をなくす」ことが必要であるとの講演であった。　　（文責：大学教育開発・支援センター博士研究員（IR 担当）　尾関美喜　）

## ○●○　センタースタッフの研究成果公開活動記録（2010 年 9 月）　○●○

教育支援システム研究部門

・青野　透　「聴覚障害学生支援と発達障害学生支援ー障害学生支援の今日的課題その２ー」『学校法人』33 巻 6 号、2010 年 9 月 10 日発行、2ー7 頁

・山田政寛、9 月 10 日　国際会議 AACE eLearn 2010 発表採択, Yamada, M "Development and Evaluation of CSCL Based on Social Presence"

・山田政寛、9 月 18 日　日本教育工学会第 26 回全国大会発表、山田政寛，北村智，御園真史，山内祐平「コミュニケーションを通じた英語学習における学習者の学業的自己概念と自己効力感の変容」